



カリフォルニアから愛をこめて —ある海外移民と宗像神社の物語—

『新修宗像市史』近代部会から

宗像大社（戦前は宗像神社）を発展させた最大の功労者が出光佐三であることはよく知られていますが、当然のことながら、彼のほかにも貴重な貢献をした人たちがたくさんいます。忘れてはならないのは、かつて遠く海外へ移住していった人たちのことです。

米国から送られてきた寄付金

宗像神社（辺津宮）の大正十年（一九二一）七月二十四日の社務日誌をみると、勝浦村（現・福津市勝浦）の花田実という人が「米国に在る花田捨藏ほか四名から、宗像神社の境内整備に役立てて欲しいと三五円が送られてきた」と言って寄付金を持参したことが記録されています。三五円というと、現代の私たちの感覚では缶ジュースも買えないほどの小さな額ですが、当時は小学校教員の月給が平均五〇円くらい、白米一〇キロの値段が三円程度でしたから、決して小さい金額ではありませんでした。

彼らはなぜわざわざはるか遠くの異国の地からこのお金を送り届けたのか？花田捨藏とはどんな人物なのか？

か？そう不思議に思っていたところ、須佐弘美さん（新修宗像市史編さん事務局）が貴重な情報を教えてくださいました。花田は雑誌『宗像』（明治から昭和にかけて宗像郡出身者たち向けに発行された雑誌）にたびたび投稿していたということです。

逆境のなかの「日本人」「宗像郡人」のアイデンティティー

須佐さんからの御教示をもとに、私はさっそく『宗像』に掲載された花田捨藏の文章を読んでみました。するとある重大な背景が見えてきました。

花田は明治三十五（一九〇二）年にカリフォルニアに移住してからぶどう栽培に取り組んできたのですが、この寄付金を送ってきたころ、この地方では日系移民を排斥する排日運動が

「猛烈」（花田の文章より引用。以下同様）になっていました。この逆境のなかで花田たち日系移民の第一世代が心配したのが、米国で生まれた自分の子どもたちが「日本人」「宗像郡人」としてのアイデンティティーを持てなくなってしまうのではということでした。

ふるさとから遠く離れているからこそ、自分たちは「日本人」であり「宗像郡人」であるということを決して忘れたくない。米国で生まれ育っていく自分の子どもたちにも、「日本人」であり「宗像郡人」であることを忘れずに生きてもらいたい——そう願う花田が、カリフォルニアの宗像出身者たちとともにお金を出し合って太平洋を越えて送り届けたのが、あの三五円だったのです。きっと花田たちには、ふるさととのつながりを少しでものこしておきたいという切実な思いがあったことでしょう。

現代では、かつての海外移民の歴史に思いをはせる人は多くありません。しかしながら、かつて異郷の地に新天地を求めた宗像出身の人びとが、ふるさとの神社に想いを寄せて貴重な貢献をしたという事実は、どれほど強調してもしすぎることはないでしょう。

カリフォルニアに眠る花田捨藏

最後にひとこと。インターネットを

利用できる方はぜひ *People Legacy*、<https://peoplelegacy.com/> という米国の死没者データベースにアクセスして *Sutezo Hanada*、という名前を検索してみてください。彼の死去日と埋葬地がわかります。これによると彼が逝去したのは昭和十七（一九四二）年七月六日。日本が米国とあの不幸な戦争に突入して約八か月後のことでした。日米開戦後に米国内の日系移民は強制収容されましたから、彼もまた強制収容所のなかで波乱の人生を終えたのかもしれない。

もしあなたが留学や旅行などで米国カリフォルニア州に足を運ぶことがあれば、よかったら花田のお墓を訪れてみませんか。私もいずれ必ず訪れるつもりです。

（近代部会 平山昇）



宗像会在米国会員（中列左端が花田捨藏）
（『宗像』第72号より）